東北の豪族集落について

長井政太郎*

Villages originated from the Premises of Local Powerful Families in Tohoku District

By

Masatarō NAGAI

(Abstract)

Gōzoku-yashiki-mura is a village type originated from the premises of local powerful families in the southern part of Tōhoku district. The origin of the older ones of them goes back to Heian period (8-12 centuries), and in some places the sites of residence of still earlier period are well preserved. Many of the rulers of early days who were the heads of the mansions became the farmers later, and settled in this part of the country. Their ways of living are to be surmised by the remaining earthen walls, moats surrounding the mansions, family shrines and the like.

The question is why this kind of powerful families could have survived through long ages in this particular district like a cultural fossil. It is partly explained by the remoteness of Tohoku district which enabled them not to be too much influenced by the changes in the center. It is also because the feudal lords of later period adopted the policy to take advantage of their influence over local people, so long as it was not against their own interests.

We can surmise the development of rural settlement here, through the analysis of present aspects of such premises. These are the grounds some 55×55 meters large, surrounded by moats and earthen walls. Some of them are even larger, and near them there lived their hereditary retainers called Nago or Fudai. Besides the historical reasons, here to be noticed is the existence of conditions for the preservation of such a way of living. The general nature of landform here is a very gentle slope, which developed some local habits different from most parts of this country. Such are the habit of using stream water for drinking, and that to let the rubbish flow into the fields as fertilizer, by means of irrigation canals. These habits all put together, helped to make the disseminated village an economically favorable type of settlement.

I. 序 説

小野武夫博士^{註1)}は長門の国萩町の郊外、沖原の奈良朝以来連綿たる旧家国守家について記載されている。国守家は明治9年の前原一誠の騒動で記録や系図等を失なってしまったが、葵明神前の大楠は数百年を経た古木であるという。佐渡の両津の旅館に佐渡の領主本間家の

一族があつて、嘉暦元年(1326)、貞和2年(1346)、正中3年(1348)等の本間山城六郎等の古文書を所持していた。また粟生島村内浦の本保繁太郎氏所有の薬師堂内にある本保氏祖先の霊篋を安置した厨子の裏に、嘉永3年先祖の千年祭を営んだことを記していた。本保家は火災で古記録類を失なっているのでもここにきてからのことかどうか明らかでないが、長く親方として勢力を振つた家で、内浦とは反対側に位置する釜谷部落から、正月「はちめ」を持つて挨拶にくると蕎麦餅を与える習慣があつたこと、などを合せ考えると、島唯一の権力者として

* 山形大学教育学部

地学雑誌, Vol. 65, No. 4(702), 1956

註1) 小野武夫: 日本村落史考, 1941

南都大仏殿御建立に功あつたので国守の号を賜つたと伝う。

長く続いた家柄らしい。

近くの晋門山観音寺門前には文和3年(1354)の大きな板碑があるから、古くから開けていたことがわかる。

三面川上流の山村三面部落の地頭小池大炊介家は壇浦から奥方^{註2)}水草局・長男四明丸・次男愛宕丸および7名の家来とともに寿永4年(1185)に落ちてきた平頼盛の子孫で33代^{註3)}になるといい、池大納言の舎弟池三位平光盛の後とも伝えられるが、小池家に残る永正8年(1511)に、15代の末孫平盛朝の写した小池家由来書には、池三位の家臣渡辺巧之助が永元元年(1165)小池の姓を許されたが、その系統を引くものとある。さらに部落内には敵に苦しめられた高橋・伊藤の両統の者が小国にいた小池氏をさそつたので、33人の家臣とともに三面に移つたといひ、高橋家の氏神の祀つてあつた元屋敷、伊藤家のいた猿田屋敷から小池家のいる三面に集まつて、一つの集落を構成したのが寛正年間(1460)であるともいい、蒹葭堂雜録^{註4)}には平氏の落人で当主で32世になるとあつて、諸説一致しない。

しかし文祿4年の村上城主春日氏の禁令の写しやら、天正頃越後で活躍する鮎川家等の記録類があるから、戦国時代には三面の地頭として取り扱われていたことが窺われる。小池家の天明3年の記録^{註5)}によると長尾家春日山城主の時代には、三面村140石40を大炊助先祖が支配を許されていたが、元和3年^{註6)}堀丹後守が村上城主となつたとき100石となり、次の城主本多能登守の召出に代理者を遣わしたのを咎められて、知行召上げとなり、5石の切米を与えられる境番になつてしまつたが、部落における地位は動かず、米沢藩の小国代官または御役屋付の侍と^{註5)}縁定めしている。すなわち慶長10年には米沢城下の物頭中津川次郎右衛門に嫁をやり、元和7年には小国代官佐藤右京に、寛永5年には小国城代丹五兵衛方に嫁入りしたとあつて、郷土として取り扱われていた。小国家中の者が百姓から嫁を迎える場合には、小池家の家族として入籍したという。小池家は部落のほゞ中央に位置した広い屋敷に住んでいたというが、明治40年頃産を失なつてからは、近隣の民家と大差のない住宅に居住している。

気仙沼に近い大島下の崎屋敷の菊田家は久須師神社の神官で、「応永7年^{註7)}(1400)(中略)気仙沼住熊谷右馬之丞種直就累代之智音伝之、而仕国君葛西高信公賜大島一円高谷館居住、清太郎義演応永20癸巳年抱大島建

立業師仏之方堂一基」とあるように大島一円の支配を命ぜられ高屋館に居住していたが、天正19年葛西家没落後神官となつた菊田越中義統の子孫で、寛永18年肝入六左衛門を主の沢屋敷に分家し、7代前に中里に清蔵を分家したという。棟を撤いて歩いた土地を自分の所有にしたといひ、大島で最も家格が高い家であるが、波浪状に起伏する岡の頂に屋敷を占め、少し離れた松の古木の下に墓地を設けている。廻館の家と呼ばれる同地の村上家でも前面に開けている田地は長崎まで自分の持地で棟を撤いて所有権を主張したのであるという。東に開けた丘の上に高い石垣を築き、長屋門を構え、いかにも豪族屋敷らしい様子を示し、名子に小作させていたという。この島では小さい集落が所々にみられ、その前面の浜を大向浜・浅根浜・要害浜・駒形浜等と呼んでいるが、それぞれの部落に大向・大要害・大浅根と呼ばれている旧家がある。有力家が浜別けし、土地を占有して開拓したもののらしい。

このように東北のうちでも離れ島や、山のなかには世の浮沈みの支配から免れて永続した豪族の居宅があり、それを中心として発達したか、それに支配されてこんにちに至つた集落が存在する。中央から離れた地域であるが故に化石のように古い豪族が破滅を免れているのであろう。

II. 庄内地方の豪族集落

この地方の豪族集落は佐藤氏^{註8)}の報告もあるが、頼朝の奥羽征伐の後に大泉の地頭を命ぜられた武藤家所属の土豪や、飽海方面の留守家、観音寺城主来次家等と関係ある土豪等が、武藤家の後に庄内を統治した最上家、それに交代した越後の本庄家、ふたゝび庄内を手に入れた最上家、最後に領主となつた酒井家が、ともに土豪の一部を武力として利用し、あるいは民政に当らせたので、しばしば政変があつたのにかゝらず、相当多くの豪族を残した。すなわち酒井家は由緒を重んじて地方の豪族を大庄屋^{註9)}、大組頭等に採用し、あるいは開田に従事させたのであつた。

特に大庄屋を命ぜられた者には50~100石の知行を与えられたので上杉景勝等^{註10)}の検地に反対して一揆を起こして平げられた者以外は、土豪または地侍として残り得たのである。

新田目の大組頭、今井家は特に古い珍しい家柄である。現在の居宅はほゞ方形に近い1,000坪ほどのもので、幅2mほどの濠をめぐらし、高さ1mの土壘で囲ま

註2) 中野城水：郷土の伝説

註3) 杉本 肇：越後国三面集落

註4) 日本隨筆全集、第5集

註5) 三面小池大炊介家日記

註6) 三面小池長次郎家日記

註7) 大島村菊田家日記

註8) 佐藤基次郎：庄内平野における近世成立の豪族屋敷村、新地理、第5巻、第2、3号

註9) 庄内大庄屋伝、筆者所藏

註10) 山形縣史

第1図 酒田市字新田目の古城址。江戸時代の村絵図

れ、その上に松の古木が生え、慶長か寛永頃にできたものであるらしい。少し離れた大物忌神社境内はほぼ東西82間^{註11)}、南北52間の不正円形の新田目城址の一部である。面積 3,987坪、北側の堀は幅6間半で、内側の土壘は上敷4間、高さ14尺程で小規模のものであるが、外側が急斜し、内側が緩く、戦国時代に築城したものでなく、秋田城址と類似した古いものである。家伝^{註12)}ならびに吹浦大物忌神社社記によると、祖先須藤某は江州今井の人で、康平5年源義家に従って軍功あり、阿部の残党平定のため出羽留守所職を命ぜられ、留守を姓とした。戦国の頃一時塚淵^{註13)}に進出して勢力を振ったが、応永16年没落し、ふたゝび丸岡民部太輔退転の後新田目に戻ったらしく、永祿6年^{註12)} (1563) には大泉の武藤家に仕え、留守遠江守と称し、文祿3年 (1594) の甘糟景継より^{註12)}「為軍役普請以下可申付、当処納千五百石不作所五百石合式千石出置候也。拾月二十日、景継判、今井どの」とあつて今井を名乗って、天正10年 (1582) には最上義光の庄内進出に応じてその旗本となり、天正16年新田目留守殿と書いた令書を貰っている。その後ふたゝび上杉の先鋒本庄家の手に庄内が制圧されるので本庄に仕えたが、慶長5年^{註12)}からの最上家再進出には遂に浪人

せざるを得なかつた。多くの土豪はこのような政変で次第に整理され、あるいは帰農するのであろう。

永享2年 (1430) の一条八幡宮祭礼日記には、8月15日の神事に留守氏が祝詞代 100貫文を納め、1,200 石の田地を寄進しているが、当時社頭には砂越代官と留守以下の参集に備えて在庁屋の設があつたとある。当時は国府在庁の官人として活躍していたものとみえる。おそらく新田目城は留守庁の館として設けられたものであつたろう。部落は新田目城を中心として小城下町として整備されたらしく、かなり整然たる集村を構成している。

承久2年^{註14)}鎌倉幕府政所より出された吹浦大物忌月山岡所官修造の督促状が、北目地頭留守殿としてあるが、その子孫は菅原を名乗り、土居の形跡厩然たる楯之内と呼ばれる屋敷に生活している。当時は本留守のほかにも新留守を設けて地頭として活動させたものらしい。本留守家にあつた義家より伝来したと称する陣太刀も大物忌神社の宝物として保存され国宝に指定されている。しかしこの方はそりの大きい太刀で時代は鎌倉頃のものともみられている。また菅原家には天正13年大泉の武藤家に組して酒田の東禅寺氏と争った判物や、慶長17年の検地帳を所持し、ともに江戸時代には大組頭を命ぜられている。国府在庁の留守氏がこんにちまで残っていることに疑問^{註15)}をもつ人もあるが、今井家には吉野時代の色々威伊予風楯と呼ばれる武具が残っており、昔から吹浦大物忌神社の6月14日の神事御浜出しに武装して下人とともに出仕し、北目郷より12人の在聴衆が勤仕する習慣が残っていたのをみても留守の系譜が残ってこんにちに至っているものと考えて大過ないと思われる。

遊佐郷宮田の内館に住む石垣家も地侍の子孫で武藤の幕下となり、天正9年の最上盆地にある真室攻撃に参加し、次いで最上家に従って1,000 石を給せられたが、改易の際浪人となりその後大組頭に採用されている。

肝煎石垣次右衛門も石垣河内の子孫で寛文3年升川谷地を開いて箕輪新田^{註16)}を設けた。

平津の今野家も楯地に居住しているので土地の人は楯之家と呼んでいる。支族10余戸は近所に纏まって居住し、同族だけの集落を構成し、共同の総墓と称すべき墓所を設けている。工藤吉次郎氏によると秋田県下にはこのような総墓を持つ同族集落が少なくないというが、山形県内では珍らしい。享保の頃は藩に多額の御用金を出したほどであつたが、その後は平百姓となつた。

遊佐郷十日町大組頭から寛政12年江地組大庄屋になつた今野喜七もその一類である。

註11) 阿部正己： 被輪の出羽郡址及国分寺址調査，郷土研究叢書，第2巻，1932

註12) 本庄字新田目，今井誠一郎氏家伝書類

註13) 飽海郡誌

註14) 大物忌神社所蔵，国宝

註15) 阿部氏筆の余里

註16) 拙稿 庄内地方京田興屋新田の研究，郷土研究叢書，第3巻，1933

吉出は応安3年(1370)註12) 佐々木石見守綱利が開いた部落である。同8年八幡宮を宅地内に勧請し、三ノ俣に玉竜寺を開いた。慶長の頃同族の義綱が江洲から訪ねきたつて養子となり50余町歩を開いたという。慶長8年9世の孫道利の時代杉沢村と山争いしたが、この時討死した功を賞せられ、山親と呼ばれて、吉出山を管理する山肝煎を勤め、52俵半の山年貢のうち5俵2斗づつ与えられた。永享7年の足利義教の感状は養子を持ち込んだものであるが、慶長9年の山争いの古文書やら元和7年(1621)の山年貢皆済状等を所持している。置賜の長井市の旧家佐々木宇右衛門家の屋敷内にも栗等の古木が多く(目通7.25m)、いかにも旧家らしいが、この方は近世初期に入つて来たもので註17)、こゝに土着してからの年限はそれほど古くない。蚕種製造やら明治初年に新式の製糸工場を設けたので産をなしたのである。

吉出の佐々木家註17)では初仙北由利えの間道穴下の道を監視していたが、上、中の2道を押える役割を果されていたのは下野沢の菅原右馬介家で、3,000 町を給せられていた。佐々木家は慶長4年仙北の夜盗を討つて100石が増されたが、最上改易で浪人となり、寛永9年遊佐荒瀬の流民31戸228人を似北より連れ戻つて川北郷目附となり、遊佐荒瀬の大肝煎石川とともに50石を支給され、流民註16)に上野沢新田、下野沢新田、北目新田、大井新田、平津新田、天神新田、草津新田等の創設を援助している。元禄4年大島田に移つて大肝煎となつたが、天保7年改易を命ぜられて蔵岡に移つた。

宮曾根の豪農佐藤信古家は祖先市郎佐衛門の時18人の家臣とともに餅山から移つて開墾した。寛文元年松山城築城の折仕官を断つて移つたのであるという。餅山に来る以前は総光寺の境内にいたが、応永4年先祖正信が戦没するまで中山の楯主であつた。

正信は信夫荘司佐藤基治の後裔といい、陸奥玉造郡柏山城から逃れて来て至徳元年(1384)総光寺を建立したという。小波渡註18)の佐藤家も基治の子孫と称し、一時山中にかくれていたのが家臣18人とともに、浜の泉おみじや附近にでてきたのが小波渡になつたという、開村500年の折建立した記念碑がある。慶長16年の検地帳の写しにみえる漁民67戸のうち25戸の者が1~2戸の名子に従えて42戸は名子であつたが佐藤家の名子が明らかでない。

III. 山形盆地の豪族集落

相模村要害の佐藤理兵衛家も佐藤基治の系譜を引くと伝えられる。同家所蔵の宅地図によると間口42間、奥行53間の広大なもので四周館堀をめぐらしてあつたが、現

在はその一部に分家を置き、28間に40間の屋敷で東側だけ幅6間の堀を残している。系図書によると佐藤五郎兵衛尉信茂からのものらしく、その前は型の通りのものであつた。初代の憲茂は豊後守と名乗り、直江兼統の長谷堂攻撃の際最上陣にあつて戦死して佐藤家初代となつてゐる。子の和泉守茂実是最上駿河守に仕え郷土となつたが、安昌院殿憲法知居士とおくられているが、3代から院号のみとなり、4代の茂快は理兵衛を名乗つて百姓となり、正保年中から松平大和守の時大庄屋に採用され、小林寺の中興開山となつてゐる。5代茂彌は苗字帯刀を許され、子の権右衛門に譲つて隠居してから、山形城内に屋敷を拝領し、侍待遇を受ける身分となつた。この頃が全盛らしく、6代豊雄は大庄屋乗馬免許で馬代金を頂戴している。7代茂詮も大庄屋を命ぜられたが8代の十郎右衛門から名主となり、9代の三郎右衛門は苗字帯刀御免となつたが、藩の貸付金を棒引して許されたものらしい。天文18年から嘉永頃までの事歴がほゞ明らかで信茂より数えると現代は16世となつてゐる。

貞享2年の議高をみると稲9,561束刈、青草830把、野畑5町7石2歩、下男35人、うち隠居に12人残し、下女10人中隠居に4人とあり、草高242石368合、馬8疋、内4疋隠居に譲り、他村出作80俵、当村出作米帳150俵故に不足70俵は手作の内より上納とある。

文化2年山形城主に貸付けた御用金4,599両3分永248文4分1厘を献納しているほどの豪家であつた。自宅附近に分家しているのは勘右衛門・政右衛門・五郎右衛門・兼吉の4軒であるが、いずれも酒造業、金貸業、農耕地の差配人となつてゐた。山形にも4軒の分家があるし、いつ分家したか不明の同姓の者も部落のうちには少なくない。

山形郊外平清水の平清水家も旧家で、邸内に湧く清水から部落名が起つたと伝えられる。母屋の前の柵の古木は目通1.95mの山形県内最大のもので数百年の樹齢と推定されている。応永12年(1405)示寂した耕竜寺の開山を助けた開基檀徒であるから、少なくとも吉野朝以来の旧家である。柵の下にある石碑に「祖穆黒金彌下野人、神龜年中來拾干歲山南居、患無水而卓枚干地得乃水、号曰平清水」とあり、南碑では57人の家来とともに流れて来たといい、最上家に仕えて1,000石を領し、後3,000石註19)となつたが、最上分限帳註20)には同家の記載のないものもある。慶安2年(1309)大庄屋を命ぜられ、佐久間を名乗り50間に70間の屋敷に居住していたが、維新の際旧姓平清水にもどつた。

白鷹山地の稲村七郎右衛門家は高い石垣の上に位置

註17) 山形大学郷土博物館所蔵記録による

註18) 山形県漁業資料、筆者所蔵

註19) 平清水家所蔵、黒印状写

註20) 筆者所蔵、分限帳にはみえないが、川崎浩良氏所蔵本には1,000石とある

第2図 要害村之内、荒番字下原全図。佐藤利兵衛宅地

し、古い薬医門が残っている。江戸時代のなか頃には紅花、青苧、生糸、蠟等を買集めて移出する農村商人で、かつは大地主であつた。検地帳^{註21)}では享保3年37石で、新五郎前36石、太郎右衛門前8石を手に入れ、宝暦7年には75石の大百姓となった。しかし実際には質米を取入れた田地が多く、山麓の山野辺に田屋を設けて年貢米の収納と特産物の買出しに当らせたが、作徳米は4,000俵ほどあつたという。先祖は鳥海山麓に居住していた郷士で一時は置賜の高玉村瑞竜院の寺侍を勤めていた。いまなお堀形がみえる屋敷跡が残っており、稲村屋敷と呼ばれている。元和8年までは山野辺城主の客分として2,600 疇の田地を与えられ、稲村備後と名乗っていたが、最上家改易の後百姓七郎右衛門となった。鳥海山を信仰して側の小山の上に安置して小鳥海と称し、屋敷の一部に寺を設けている。寛永20年には16戸の小村で、稲村家は小盆地の縁に屋敷取りしその中心となっていた。80戸になったこんにちでも部落内には稲村を名乗る者が多いが、直接の分家のほかに草鞋ぬぎ分家も少ないという。

註21) 山形大学附属郷土博物館寄託資料

元禄8年^{註22)}稲村家では月布の大泉家から500両借入れているが、この家には金を9,232両3分と米65.5俵を貸付けているほどの大金持であつたが、正俣2年にすでに2,183両2分と400文、銀72匁、米40俵を貸付けていた。慶長7年^{註23)}の奥書ある管井主水筆の天正14年の寒河江領主大江高基家臣録に勘定奉行大泉平右衛門とみえる家柄である。始め檜山に住んでいたが最上家2代の家親より松田角助に与えた散田を譲り受けて月布に移つて金貸となつた。

天明8年には2,439 両2分と米282.5俵を貸し、809俵の作徳米を得ていたが、手作地も89.5俵場もあつた大百姓でもあつた。

明治8年2,042俵の作徳米が入っていた天童の青柳家も、天正12年の天童城から追われた天童頼澄の家臣で、先祖大学は戦死し帰農したと伝えられる。正徳2年54石、天明2年63石、京和3年76石、文化12年86石、文政3年130石、嘉永3年149石、安政3年157石、慶応元年161石と次第に大きくなったように見えるが、実際は明治8年2,042俵に急に増加したのでなく、江戸時

註22) 大泉豊雄氏旧蔵

註23) 河北町菅井半五郎氏旧蔵

第3図 西置賜郡飯豊村黒沢坪沼(壺沼在家)河家(k)と家中(a, b, c, d, E, F,)

代でもすでに相当大きい地主であつた。

IV. 米沢盆地の豪族屋敷

米沢盆地には散村地帯に特に沢山の豪族屋敷が残っており、そのなかには分家団または名子家来等が近接して居住し小村を構成している例も少なくない。この地方では文祿4年の邑鑑に見えるほどの村には例外なく榎と呼ばれる地名があり、約1町歩ないし2町歩程度の館跡が残っている。榎にそのまま元の居住者が残っている例もあるが、多くは榎屋敷は畑地または分割されて小さい屋敷となつているが、その近傍には中世文書に見える在家と呼ばれる地名または在家の系譜を引く者が残っている。これらの在家は3貫文すなわち大体3町歩内外の大団地として開拓された耕地に発生したものらしく、なかには姓を名乗り、天正頃には肝煎を勤めていた高山の布施

助右衛門のごとき例が少なくない。3反程度の屋敷で8間内外の館堀をめぐらした屋敷が数多く残っているのである。

黒沢の河村家は北館と呼ばれ、南館の渡辺家と対立した旧家であるが、小字名では坪沼で、その側に館と呼ばれる地名が残っている。

しかしその方はすでに崩れてしまつて柵跡はなく、994坪の1間半ないし3間の館堀をめぐらした屋敷に河村家が居住し、それに続いてほとんど同じ形態の3反4畝3歩の元は屋敷の一部であつたらしくみえる畑がある。そのほか河村屋敷に続いて1反2畝の細長い草生地があつて、屋敷神と400年位と推定される杉の古木が残っている。草生地の外側にも5間幅の窪地があつて外堀りの存在を物語っているが、東西に並ぶ屋敷と畑の列に平行して15間幅の畑があり、その外側にも屋敷神の西方に残

ついている窪地に直交する同じ幅の水田が見られる。

この外堀と内堀との間の1反8畝20歩の畑が氏寺高伝寺があつた場所らしく、「^{註24}高伝寺拙者屋敷に御座候証拠天正十五年鎮守熊野棟札に相見へ申候」とある。屋敷の東方には佐藤屋の家号で呼ばれる2反15歩の屋敷があり、その隣には2反28歩の長谷川家があつたが外に移り、梅津角兵衛、松村久彌、樋口孫米、佐藤新右衛門、梅津友七、横沢家、かべ屋、的場等今絶家となつた屋敷があつて、いずれも家中と呼ばれていたが、そのうち5軒だけが東方の一角に並んでいる。河村家は二重堀りにめぐられ、その屋敷続きに1町5反3畝14歩の井戸尻の田を持ち、そのほか7町9反1畝15の水田と7反2畝6歩の畑、17町3反6畝24歩の山林雑地を所持し、一割の地域を占有した土豪らしい。同家の旧記には「我等先祖佐藤丹波と申者天正年中より文祿3年迄肝煎役相勤申候」とあつて天正以前の様子が不明であるが、大永5年に湯村犬松に伊達植宗が与えた「梅津^{註25}備後よりの買地下長井之庄黒沢の御内壺沼宮在家〇〇文之所一字不残」とある土地を占めているのである。佐藤姓を名乗っていたが享保6年九野本の免許百姓河村与右衛門の娘と株を貰受けて免許百姓となり河村姓に改めている。寛永15年^{註26}の検地帳に15所89畝19歩の土地と14石491の田地を所持していたが、屋敷は1反7畝18歩とある。おそらく狭く記載されているのであろう。寛永5年50石を開いたほか、肝煎役20石を村方負担として貰い、そのうえ年貢の一部を免除される免許百姓の株を獲得したので、一層発展することができたわけである。

南館の渡部家は16代伝えた過去帳^{註27}があり、「渡部治部少輔弟土佐不好武、慶長3年百姓に成候。此人召使百人余と甚だ大農いたし候由」とみえ、さらに疫部家譜^{註28}には

一、（前略）当館立内寺共に仙台へ引越候。前当村にては高伝寺一ヶ寺に集めた由に候。

一、当館主渡部（本苗大立目といふ）治部少輔南館分窪吉祥寺道正川畑に知行有之候由、其節末子土佐と申者百姓に成、此館を相続仕、右土佐兄弟渡部治部少輔仙台御供仕候。系図共に持行候由、土佐より掃部に伝へ、掃部より市郎兵衛に伝ふ。右代々乃事書地方御検地帳に明白なり。渡部土佐右は慶長3年此人初て百姓に成候。館前4反道下240 刈、井戸尻 400刈、壇之越四百刈、沢水二百刈、箕向千刈、横又千刈、北田千刈、徳田四百三十刈、八幡堂七反、宮田千二百刈、中嶋七反、

松畑七反外、畑と屋敷共に九反、高壘万百三拾刈之百姓也。此人武士を不好故に百姓に成」

と大立目治部少輔の弟土佐より起つた百余人の召仕を抱え、10,130 刈、すなわち最少に計算しても十数町歩を開作していた。越後関の豪家渡部三右衛門の本家と伝え、宮城県飯野川の地頭として維新を迎えた大立目氏が、近年故郷を訪ねたことがあつたという。あるいは館主大立目家が去つた跡家臣の渡辺氏が入つて相続したのではないと思われる。寛永15年の名寄帳では178 石 548 合で100石 788合を掃部、78石36を仁右衛門に別けて2軒に別かれ、元祿の頃前屋敷に儀左衛門、高柳に善右衛門、大畑に猿右衛門を別けたが、安永7年にはふたたび202 石 688と大きくなっている。農地改革前の渡辺家は2間半の濠をめぐらし、井戸尻の田が4町歩で、前田が2町、壇ノ越が9反20歩、餅田が6反5畝26歩で、屋敷を中心として1団地11町歩程を所持していたが、これは10,200 刈の田地に相当するのであろう。地名は御城といふ家名を南館というも、酒屋になってから改造したので館を想像すること不可能になつた。分家6軒に渡部を名乗らせ、自らは渡辺と書いて区別しているという。

米沢藩では由緒ある土豪の子孫と献金によつて登田された者を免許百姓と称して馬上免許、苗字帯刀免許といい、納税の一部の免除を許していた。文政7年^{註29}の免許百姓の面附によると、苗字のみの免許を受けている者^{註30}13名、苗字帯刀免許者 164名記してあるが、うち36名は最上戦争に出陣した者で、そのうち7名は10名内外の家中を連れて出陣した者であつた。慶長時代には宮内だけでも13名の武士がいて100石宛を給せられ、北条郷18騎に属していたが、最上との和議成立とともに知行召上げとなり、抱地自由の特権を附与されて郷土化したのであるが、100～300 石ほどの荒地を開き、沢山の百姓を取立てた者も20軒ほどあつた。

萩生の宇津木源右衛門は800石開いて25石を給せられたが、後に知行召上げとなつているし、西根村敏進代の金田平次郎は開作地の内50石を給せられた。最上戦争に畑谷で戦死したから半知りとなつている。また大塚の寒河江牛之助は10人連れて長尾隊に従軍し、500石を開き百姓20人取立てたので50石を給せられ、ほぼ1町歩に近い屋敷に長屋門を構えて居住し、同村の牛谷甚五右衛門は慶長には250石で大塚城を領つていたのが後25石の在郷武士となつている。同村の皆川三右衛門^{註31}も、田屋町の南端に50間四面の屋敷に2間半幅の堀をめぐらし、長屋門を備えているが、由緒書によると宝永元年広野谷地10

註24) 河村家日記

註25) 山形縣史 第1巻

註26) 飯豊村黒沢渡辺家日記

註27) 赤湯町丹波館所藏

註28) 拙稿 上杉藩の郷土聚落の研究、郷土研究叢書、第6輯

註29) 拙稿 置賜盆地の豪族聚落、山形縣文化財調査報告、1956

註30) 相馬藩政史

註31) 太田家系図書

町歩を開いたが上納できなかつたので、同6年に欠所になつたとある。越後から上杉家について来た者で始め80石であつたが、最上戦争に上下8人で加わつて褒美に永楽銭120貫拝領したとある。皆川三右衛門堀と呼ばれる堀を設け250石ほどを開墾したのであつた。

V. 相馬と仙台領の豪族集落

相馬藩は頼朝に任命された地頭から発生し慶長7年(1602)一時知行召上げとなつたのみで、薩摩の島津藩と同様に領地換えがなかつたので、中世時代に配置された武士の一部がそのまま農民に混じって幕末に至っている珍しい藩である。慶長16年^{註30)}中村を居城とし、泉城を隠居城と定め、28石以上の高祿の者212名を城下に集め、府下給人と称したが、なお在郷居住者が880名ほどあつた。そのうち583名が元和3年の強訴事件で祿を失なつたが、351名は相不変に郷に居住して半農半武士の生活を続けた。府下給人となつた者には堀に居住していた者多かつたが、在郷に留まつた者は多少のごまかしをやつて残つた者があつたとしても、大部分は小祿の者であつたから広大な館を構えていた者はなかつたらしい。

しかし大^{おほみか}廻村北原の荒川太郎右衛門のごとき30間四間の屋敷に3間幅の堀をめぐらした堂々たる土豪屋敷が残っている。相馬郡石神村門馬三郎氏宅等もほゞこれに類するものである。この地方は一体に地主が少ないので土堀をめぐらした白壁塗りの土蔵の屋敷等が少ないのできわ立つて立派な屋敷になっている。赤木の太田家も屋敷林に囲まれ、一軒だけ孤立し、背後に広い耕地を持ちほゞ1,000坪等の屋敷になつているが、この方は元享^{註31)}3年(1328)に相馬家に仕え、城下移駐を好まなかつたので28石と称して小高に留まつたが、強訴一件で浪人し、

宇田郷稲村で100石開いて帰農していたのを、義胤公の時代ふたゝび給人に採用されて赤木に移り、50石を開いたのであるが、資力にまかせて製塩業を営み、漁業に投資し、金貸ししたり、新百姓育成に開墾したり、盛んに事業を経営するとともに肝煎となつて村を統轄する仕事もしている。このように農民のなかに混じって郷士として生活して来たので農民には門や堀を禁じ家屋の構造を制限する等、一目で武士と区別できるようにしていたのである。藩内一円にこのような給人が散布するのみならず、追放されたのが復帰し、開墾して郷士に復した者も沢山分布しているが、山形県内でみられるような大規模な豪族屋敷はみられない。

相馬領に近接した仙台領には品変り^{註32)}百姓と呼ばれ百姓でありながら農閑期には武芸を習い事あらば動員される半武士的な住民があつたが、御見懸衆と呼ばれる1町屋敷に住む郷士も農耕を営んでいた。2間幅位の館堀と内側に2間幅ほどの土壘をめぐらし、そのうえに竹や樹木を植付け、森のごとく見えるのが普通となつている。俗に大同屋敷と呼ばれ、そのなかに畑も田も家もあり、墓地を設けてあるのも少なくない。大部分は伊達家以前の土豪で後世伊達に隨身した者が多い。

大崎葛西の遺臣と伝えられる者が多いのであるが、伊具郡梶尾村向井家のごとく3町歩の屋敷を拝領していた者もあつた。屋敷は知行外であつたから祿が少なくとも生活が可能であつたわけである。

VI. 結 語

横手盆地にも「此の里に^{註33)}小百姓専右衛門という者あり、貳拾代ほど家相統すといへり。祖先は南部の浪人にて」と享保以前の記録に20代以前からの旧家がみえ、正徳4年の検地帳にも「5石当村専右衛門が先祖にて本田起返り開き御忠進申候につき、本田の内辛労免被下候処」と辛労免を与えられていた。文祿3年死んだ南陽院の開山者を助けて開基壇徒となつている角兵衛家もその一類で郷士であつた。このような土豪屋敷が秋田藩内にも所々にあつてそれが集落の中心的地位を占めていた。尾留川氏^{註34)}も二重堀をめぐらした土豪屋敷の存在を報告している。

東北地方には以上各地の例に明らかなごとく、古い時代の土豪がその生活形態を著しくそこなわれることなしに世の浮き沈みを免かれて化石のごとく残っているのが少なくない。むろん大部分が破壊されたのであろうが、米沢盆地吉島の島貫家のごとく数百町歩の開墾地の

第4図 亶理郡十文字村佐藤の豪族屋敷

註32) 伊具郡誌

註33) 拙稿「東北地方に於ける郷士集落について、地理学評論, Vol. 29, No. 11, 12

註34) 高梨村勢発達史

なかに30間四面の館堀をめぐらした生活が流水飲用、呑尻の井戸尻の田に流し込む生活が、肥料の少ない時代には都合の良い生活形態であつたが故に、こんにちまで残り得たものと思うが、屋敷神の治安2年(1022)鰯口は失なわれても、山形県内最古の、樹令数百年を経ている梨の巨木が土壘上に残っていることから少なくともこのような生活形態が数百年にわたって継続していること

が窺われる。われわれはこのような残象を復原することによつて集落発展の一面を知りうるのである。

谷岡氏等^{註36)}によつて人文地理学に報告された甲州の豪族屋敷に比較すべき、豪族屋敷が東北^{註37)}の南部に広く分布し、多くは集落構成の中核となり、その四周にあるいは家中、名子、小作人等の集団集落を結成していることは注目に価する。

註35) 原 正平：秋田縣総合郷土研究

註36) 谷岡武雄・須藤 賢：甲府盆地における豪族屋敷，歴史地理学の諸問題，人文地理学会，1952

註37) 拙稿 東北の聚落，古今書院